

週日の説教

金 大烈 神父 2011年1月12日(水)

《イエス様と出会う信仰体験》

の平和

あるお母さんが一生懸命に娘さんを育てて来ました。その娘さんが成長してお嫁にいく年頃を迎えました。周りの人々が「あの人はいい人ですよ」「ええ、あの人はちょっとね」とか、相応しいと思われる相手の評判を色々と話してくれます。とにかく最後選んだのは、漁師で誠実で無口だけれども一生懸命で、家族を大事にしてくれる人がいますと紹介された人でした。その人の名前は「シモン」。お互いに紹介されて結婚します。そしてその「シモン・ペトロ」の姑となったのが、娘を嫁がせた今日の福音(マルコ1・29-39)で述べられている姑です。

さあ、その姑の所に、ペトロがイエス様を連れて行ったわけです。その時『姑が熱を出して寝ていた』と聖書は述べています。よく考えてみて下さい。姑の立場になってみましようか。お嫁に行った娘が、上手くいっていると幸せなのですが、そうじゃない場合もありますよね。姑としては花婿さんを信じていたわけです。娘を任せただけです。けれどもペトロはどうだったでしょうか。自分の職業も全部捨てて、何も分からない人に、扇動する若者について行く人生を決めたわけです。ペトロはそれでも良かったでしょうか、ペトロの妻はどうだったでしょうか。

皆様だったら、皆様が姑の立場だったら、娘をお嫁に行かせたのにそのお相手のお婿さんが、全てを捨ててイエスという何者かも分からない人物について行ったらどうなさいます。その婿さんが大嫌いになるでしょう。もしかして、この姑の熱は怒りによって出た病気かも知れません。しかしイエスという頭かしらが現れました。姑はこの時その人と初めて出会うわけです。そしてその方が伸ばされた手を取って立ち上がったのです。そして福音には、「病だった彼女は直ぐもてなしをした」と書いてあります。その短い出会い、イエスという人物と姑の出会いは本当に短いものだと思います。しかし彼女の心の働きにどのような変化があったかは、すぐ感じられます。立ち上がったばかりの人がもてなしをした。常識的には考えられません。彼女はどの位深い体験によって、このような姿を見せることが出来たのでしょうか。今まで婿に持っていた色々な憎しみ、それも一瞬にして無くなってしまふ。そして、娘よりも婿のことを安心して送り出せる感じ、「私が心を込めてあなた方をもてなします。これからは心配しません」と。このような事を信仰的な出会いと言います。

皆様はどうでしょうか。このような体験をしたことがあるのでしょうか。色々な全ての心配、欲望、それが一瞬にして無くなる体験。「私が今まで追いかけて来たことは全部無駄なことだった。空しい物だった。」というこの体験。この体験こそが私達に何よりも必要なことではないでしょうか。これがなかったら、いつも観念的な思考に陥り、頭で考え判断し、結局、神様が私達に話すのではなくて私が神様を語る。神様を作る。こういう間違いの恐れがあることをいつも意識しなくてはなりません。

今日の福音のこの姑の話は、簡単に考えてしまうとただ過ぎてしまいます。しかし、この物語には本当に深い意味が隠れていることを心に止めましょう。

もうひとつ『人々が探しています。』と福音は述べています。これは「人々はあなたを必要としています。」ということになります。

さあ皆様が、どこかに行って上手く仕事をしていい評価をもらい、そして褒められたとしましょう。そのとき人々は「いつまでも私達と一緒にいてください」と、そういう話まで持ち込んだとしましょう。人の要求は必要なことです。しかし、信者としての私達の人生は、その時、本当に私はここに続けているべきかを識別しなければなりません。

祈られて、イエス様は識別なさったのでしょうか。『人里離れたところへ出て行き、そこで祈っておられた。』と聖書は述べています。そしてイエス様はおっしゃいました。「今、去る時が来た。他のところも行かなければならない」と。やっぱり去る人も去らせる人も寂しいのは同じです。とにかく御旨を量れるその恵をいただいた者なら、やっぱりここにいるべきか、去るべきかを識別しなければなりません。これは普通の私達の人生でも、毎日の暮らしの中でも、よくある識別ではないかと思えます。

ありがとうございました。